



央州寺通信 八月号



官原祐軌 ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com

「浄土真宗と寺紋」

日本の各家庭に家紋があるように、各宗派にも寺紋があります。私たち浄土真宗本願寺派の寺紋は下がり藤と言います。しかし、その変遷を見てみると下がり藤の使用は割りと最近のことです。今月はこの寺紋について記事を書かせていただきます。

宗祖親鸞聖人（1173-1263）は日野有範公のご子息として誕生されました。日野家は平安時代に強大な権力を誇った藤原家の流れにある一族であるといわれています。藤原家は下がり藤（figure 1）を家紋としておりましたが、日野家は鶴丸（figure 2）が家紋でありました。残念ながら寺紋に関する研究は乏しく、私が発見できたのは浄土真宗総合研究所の野村淳爾氏による『本願寺寺紋の変遷』のみでした。野村氏は各宗主（門主）の絵像を確認し、その絵像で着用されている衣や袈裟にどのような紋が施されているかを見ることに拠って寺紋の変遷を探ろうとされました。そこで、得られた情報を基に今月号の記事は構成しますが、多少私なりの調査と推理も入っていますので、この記事に書かれていることが全て事実であるという保障はできません…。

野村氏の調査によれば蓮如上人とそれ以前の宗主の袈裟や衣には寺紋が確認できないそうです。初めて宗主の衣や袈裟に寺紋が確認できるのは第九代実如上人で、「鶴丸」を使われていたそうです。

第十代証如上人は九条尚経公の猶子となったとあります。九条家の家紋は下がり藤でしたが、ここではまだ下がり藤の使用は見られず、違う藤の紋である八藤紋（figure 3）が使用されていました。この八藤紋は今でも使用されています。

第十一代顕如上人の時代には織田信長との戦争状態にありましたが、最終的に顕如上人は信長と和平を結びました。信長亡き後、豊臣秀吉が天下を獲りますが、秀吉は本願寺を監視する意味だったのか、その力を利用したかったのか、はたまた本願力のみ教えに惹かれたのかはわかりませんが、本願寺には大層よくしてくれました。西本願寺境内にあります国宝「飛雲閣」は秀吉の聚楽第の遺構であるとも伝えられています。その豊臣家の家紋が五七桐（figure 4）でした。豊臣家より使用が許されたのか、はたまた与えられたのかはわかりませんが顕如上人以降の宗主にはこの五七桐の使用が見られます。ちなみに顕如上人の次の代から本願寺は西（本願寺派）と東（大谷派）に分かれました。

第十四代良如上人の母君は皇室のご出身、そして良如上人ご自身の二番目のお裏方さまが皇室のご出身でした。皇室の紋は菊花紋（figure 5）であります。良如上人より菊花紋の使用も見られます。どうやら、江戸時代には將軍家の紋である葵紋の使用はかたく禁じられていたようですが、菊花紋については明治時代に入るまで利用が許されていたようです。

さて、冒頭に述べましたように、今現在本願寺派で使用されている下がり藤の紋の使用は近年のことです。下がり藤は藤原家の流れを汲む九条家の紋（figure 6）でありました。本願寺派の大谷探検隊で有名な第22代鏡如上人（大谷光瑞）がご結婚されたのが九条籌子お裏方で、九条家の紋を若干アレンジしたものが本願寺下がり藤となっています。（figure 7）

では、全ての浄土真宗の宗派（公式には十派）が下がり藤を使っているかということそうではありません。前出のように本願寺は西と東に第十二代で分派しました。大谷派の第十三世琢如上人は近衛信尋公のご息女とご結婚されました。近衛家の家紋が牡丹（figure 8）であったので大谷派は牡

丹を使用するようになったのではないだろうかと推測いたします。

仏光寺派は本願寺派と似たような下がり藤ですが、その起源は少し違います。仏光寺派は本願寺と違い、親鸞聖人のお弟子さんであられた真仏上人によって開かれました。この仏光寺派の特筆すべき所は今から600年ほど前に既に女性の宗主がおられたということです。その当時の時代背景を考えるとこれはすごいことだなと思います。

さて、この仏光寺派の第13世・14世の宗主が二条家の猶子となりました。二条家の家紋が下がり藤 (figure 9) であったのですが、九条家の下がり藤とは若干違い、藤原家のものに近いものでした。これを少し変更したものが今の仏光寺派の寺紋となっています (figure 10)。

真宗教団連合というものがありまして、真宗十派が加盟しています。私が確認できた限りでは本願寺派・高田派・仏光寺派・木辺派・出雲路派・誠照寺派が何かしらの下がり藤を紋としていて、大谷派と興正派が牡丹を紋としています。三門徒派と山元派については確認ができませんでした。何にせよ、本願寺派といえば下がり藤という印象ですが、実は近年からの使用である事、そして御門主さまの結婚によって紋が変わってきたという背景も考えると将来にはまた違った寺紋となっていることもありえるかも知れませんね。

合掌

文責：菅原祐軌，央州寺駐在開教使

Figure 1



Figure 2



Figure 3



Figure 4



Figure 5

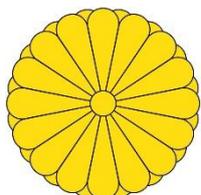


Figure 6



Figure 7



Figure 8



Figure 9



Figure 10

